

## 雪に耐えて梅花<sup>うるわ</sup>麗し

### コロナ禍における東京国立博物館の特別展

#### 猪熊 兼樹

東京国立博物館 特別展室長



#### 略歴

関西学院大学大学院文学修士（工芸史専攻）。九州国立博物館研究員、東京国立博物館研究員、文化庁文化財調査官を経て、現職に至る。著書『宮廷物質文化史』中央公論美術出版 2017 年、『旧儀式図画帖にみる宮廷の年中行事』東京国立博物館 2018 ほか。近年は、前近代の東アジア（日本、中国、韓国、ベトナム、琉球）の宮廷で用いられていた物質文化（宮殿、調度、服飾）を対象として、各宮廷を相対的に検証する研究を行なっている。

#### 発表内容

昨年（2020 年）はほとんどコロナ禍のなかで 1 年が過ぎた。世界中にとって大変な年であった。もともと 2020 年は東京国立博物館（以下、東博）にとって大変な年になると予想されていた。同年は東京オリンピック・パラリンピックの開催年であり、国内外から東京を訪れる人々に向けて、東博ではさまざまな企画を用意しており、2020 年度（日本の年度は 4 月から 3 月）には 14 件の特別展を用意していた。しかし、コロナ禍のために、そのうち 10 件が中止か延期となった。

日本では、2020 年 1 月 15 日になって、国内初の新型コロナウイルスの感染事例が確認された。感染拡大の状況を受けて、博物館では消毒液を設置し、マスク着用を呼びかけるサインを日本語、英語、中国語、韓国語の 4 言語で掲出するなどの対策を講じた。そして、ギャラリートークや講演会などの集客イベント、ハンズオン展示などの接触を伴う展示をしばらく止めることとした。2 月 26 日には、総理大臣より、全国的なスポーツ・文化イベントを 2 週間の中止または延期の要請がなされ、東博では、開催中の特別展「出雲と大和」の会期を 10 日間ほど残して閉会して、翌 27 日より臨時休館となった。3 月 24 日には東京オリンピック・パラリンピックを翌年に延期する発表がされ、4 月 7 日には東京などの 7 都府県を対象に緊急事態宣言が発出され、4 月 16 日にはその対象が全国に拡大した。緊急事態宣言は、欧米のロックダウンほどの強制力はないが、市民に対して不要不急の外出の自粛を促すものである。

臨時休館中には、今後の特別展の開催に関するウェブ会議が行なわれた。特別展は、館内外の多くの関係者が協力して開催されているので、これを停止するには、それら関係者との合意が必要である。よもや特別展を予定通りに強行しようとする関係者はおらず、予定日に開会しない点は合意できても、完全な中止か延期かといったあたりになると意見の相違も出てきて、合意点を

調整するのは困難である。開会を延期する場合には、会期日数を維持するために閉会日をも延期したいという意向が多いが、会期全体をずらすとすれば、いくつか問題がある。特別展の出陳作品は、会期に合わせて出陳許可を得るが、所蔵者の意向もあるので、こちらの都合で借用期間を延ばすわけにいかない。従って、全作品について、借用期間の変更を交渉する必要がある。また、会期を延期するとしても、2020年以降にも東博の各会場の予定が入っているので、まずは後続の展覧会の会期を動かさなくてはならない。それら後続の展覧会でも、すでに借用期間が決まった作品もあるので、数年先まで見通した調整が必要となる。その結果を受けながら複雑なパズルを組み立ててゆくが、臨時休館がいつまで続くか不明な状況で、次々と更新される情報を分析しながら検討を重ねざるをえなかった。

5月25日に緊急事態宣言が解除されると、東博は感染予防策を講じたうえで、1週間後の6月2日から平常展を限定的に再開した。2月27日からの96日間にわたる閉館は、東博史上、戦後最長の期間となった。感染予防対策は、当館側の取り組みと、来館者側へのお願いに分けることができる。まず、当館の取り組みは、検温の実施。館内の消毒、換気の徹底。会場内の3密（密閉・密集・密接）の防止などである。来館者へのお願いは、病気の症状がある方には来館のお断り。マスク着用、アルコール消毒のお願い。鑑賞場所の譲り合いや会話を控えることのお願などである。



発表の配信画面

特別展「きもの KIMONO」（2020年4月14日～6月7日）は、会場の設営が完成し、アメリカから借用する一部の作品を除いてほぼ全てが集結していた。本展は、中世から現代までの日本の着物の歴史を紹介する展覧会である。準備万端のまま中止せざるをえなかったかもしれないが、展覧会の担当キュレーターが各所蔵者へ丁寧に連絡をとり、幸いにも快諾をいただき、当初から2か月ほど遅らせた会期（6月30日～8月23日）で開催された。本展の運営では、来館者の密集回避のために、1時間あたりの入場人数を設定して、オンラインによる日時指定券の事前予約制を導入して、来館者には90分での鑑賞を促すなどの工夫をした。また、近年は会場内に撮影コーナーを用意して、ツイッターなどで発信してもらう工夫があったが、これは人が密集するので止めた。一方、本展の展示内容を紹介する動画を配信した。特別展を再開して感じたのは、市民が作品に出会うこと、鑑賞の場を心から楽しみにしていたことである。展覧会は作品鑑賞が目的だが、同じ興味の人々と時間や空間を共有する社交の場でもあることを改めて感じた。

コロナ禍で特別展の運営にいくつかの変化が生じた。しばらく停止となった撮影コーナーやハンズオン展示は、作品に親しむ工夫であったので、いずれは回復したい。会場内の人数を制限す

る方式などは、改善すべき点もあるが、落ち着いた鑑賞環境を提供したようにも思われる。動画配信は、動画を見て満足するのではなく、かえって実物を観たいという興味や関心を引き起こしたように思われる。この逆境のなかで工夫された方式を、通常の不完全方式や省略方式と見なさず、コロナ禍が収束した後は、以前にも増して快適に鑑賞を楽しむための新方式につながれば良いと願う。

以上の講演ののち、京都の泉屋博古館の実方葉子学芸部長とオンラインを通じて、コロナ禍収束以後の展覧会の企画や鑑賞の展望について意見交換を行なった。

## トークセッション 4

**猪熊 兼樹**

**実方 葉子（泉屋博古館 学芸部長、日本）**

実方 葉子（以下、S）：新型コロナウイルスという未知の存在に1年前、人類が突然出会って、手探りの中で何とか戦ってきました。これは現在進行中で、世界中で皆様が戦っているわけですが、今日のご発表は東博の一番核となる事業、特別展について、初期のご対応から、さまざま途中での調整だとか、苦渋の判断だとかありながら、計画を変更して今までやってこられた、そのご様子、細かに教えていただきまして、もう一つ一つ、こちらが胃が痛くなるような、そんなふうにも伺っていました。本当にいくつもの特別展、例えば法隆寺の百済観音の展覧会なんかでも、あんなに脆弱で貴重なものを東京で多くの方に見ていただくというようなことで、随分、輸送にも展示にもご配慮があった、ご苦労されたかと思います。もうあとは見ていただくだけというお姿の様子も色々なメディアで紹介されましたし、それが対面ではお客さまに会えずお帰りになった。そんなことも非常に切なくお伺いしたところです。開かない展覧会はないという言葉がありますけれども、本当に学芸員、展覧会に関わる多くの人たちがその開催に向けて、もう開くものだと思って必死になってやっていた。それが開かないという、当たり前が一気に崩れてしまう。そんな体験を日本だけではなく世界の博物館が体験していたということも、改めて感じさせられました。

私の勤務する泉屋博古館は京都にある中小規模の私立美術館でして、いろんな展示室があるのですが、日本美術は、主に300平米ぐらいの企画展示室でこぢんまりやっているのです。住友家の伝来品などのコレクションの展示を中心に紹介しています。そこでも去年は2か月、臨時休館を余儀なくされました。その間、予定していた特別展が、やはり借用の関係でなかなか準備ができないということで延期をしたりしまして、途中で打ち切っていた館蔵品展を再開して、延長してご覧いただいた。そんなことでしのいだということがあります。2か月の空白からの再開後、数は多くないのですがお客様にお越しいただきました。そのお姿がとても印象的で。というのも、お一人お一人、もう本当にじっくり作品に向き合って対話されているような、そんな十分楽しん

でらっしゃる様子というものは目からもとても伝わってきて、とても印象深かったです。

私自身も、館藏品ですので見慣れたものたちばかりだったのですけれども、改めてこんなに輝いていたのかとを感じるような、もう見違えてしまうような体験をしまして、コレクションの価値というのも再認識させられるような、そんな体験がありました。今日、展覧会は日本だけではなく世界中でたくさん行われていて、もうとても見切れないくらいあふれているかと思えば、やっぱり美術と出会うということは当たり前ではなく、かけがえのない機会なんだなということを思い出させてくれました。このコロナ禍というものがもたらした、一つの気づきではなかったかなというふうに思います。東博のジパング展についてのコメントでも、鎖国の中での人々の文物への思いというものが、すごく共感させられるところでした。

お伺いしたいこといっぱいあるのですが、絞ってお尋ねします。今、申しましたように、コロナ禍によってシステム変更を余儀なくされているわけですが、それによって気付いたことは随分多かったのではないかと思います。

まずお伺いしたいことが、展覧会の企画についてです。新型コロナウイルスの収束後、展覧会の枠組みや方向性に何か変化が生じるというようなことはお考えでしょうか。特に特別展についてですが、特別展というと、国内外から本当に貴重なものを一つのコンセプトで集められて私たちにを見せていただくというすごく貴重な機会でもあるのですが、一方で、東博には膨大なコレクション、あるいは寄託品などがあります。先日、ジパング展を仕切り直して館藏品のみで再構成した企画展もとても魅力的に拝見いたしましたけれども、中にはなかなか気になるけど調査できずに眠っているコレクションもあるというお声を東博の方からも聞くのですが、その特別展の枠の中で、さらに館藏品にスポット当てていくというような考え方などはないでしょうか。さまざまな問題があると思うのですが、ちょっとそのあたりを教えてください。

猪熊 兼樹（以下、I）：ありがとうございます。まず泉屋博古館の事情もやはり当館と同様だったということですね。私がお話したのは特別展での、様々な調整の中での苦労なので、これは東博の特別展に限られた話ではなく、世間の本当に色々な方が同様な苦労をされたわけですので、自分の話にどこまで特殊性があったかということも思うのですが、やはり博物館も等しく、同じような苦労があったと思うのです。

それでお尋ねいただいたことなのですが、まず館藏品の調査研究ということは、当館のほうでは平常展の枠の中で、時々、特集陳列というものを行っております。それは研究員が館藏品の調査研究をした時に、小さな展示室を使うことが多いのですが、恐らくそういう部分で館藏品に関する知見というのは紹介していくことになるのだらうと思います。このコロナ禍で、研究員の中にはかえって研究も今の間にできることをするというで頑張った者もあり、論文もまとめたりしているようなので、近々、特集陳列に充実した成果が出てくるのではないかと考えております。

私どもの特別展は結構外部からお借りすることが多く、先ほども少し触れましたけども、数年前から予定が結構決まっていたりするので、急激な方向転換というのはなかなか難しいかもしれません。恐らく今おっしゃられたようなことは、今後いろいろと話題になって、検討されることになってくるのだらうと思います。ただ、今回やはりお借りしている作品を、予定どおりの期間にお返しができないというようなことがありました。もちろんその間、きちんと厳重に管理して注意深く保管しておりましたし、先方にも事情を説明して理解していただけたのですが、やはりそこがきちんと果たせないことがあったということを考えると、海外からお借りする時、国内からお借りする時ですが、より用心深く、何が起こるか分からないということを考えないといけないというのは本当に感じたことであります。

S: おっしゃられたように、本当にこれまでもさまざまな形で館蔵品に対する成果や発表を展覧会という形でご披露されていて、どうしても一般の方には広報という形では特別展に光が当たりがちですが、そういった辺りも今回、新たに発信といいますか、来館者の皆さまもいろいろ気付かれたこともあろうかと思しますので、より多くの方に見ていただけたらと思います。そして、今温められている論文たちの成果を楽しみにしております。

では次に鑑賞する側のことについてお伺いしたいのですが、新型コロナウイルスの終息後について、いろいろニューノーマルなどと叫ばれているところですが、美術鑑賞の新しいスタイル等、何か変化があるとお考えでしょうか。あるいは、どうあるべきとお考えでしょうか。というのも、ハンズオンもできない、ギャラリートークもできない、当館ではボランティアの解説スタッフなどが非常に活躍をしていたのですが、それも今はできないという、そういう中で不自由も多いのですが、一般の来館者としてよかったなと思うことは、予約制のことですね。重要な展覧会では仕方ないことだったのですが、これまでは行列して入って、立ち止まらないでくださいというような注意がありましたが、そういったことがなくなり、予約のひと手間で何だかすごく充実した気分になれたというようなこともあります。

あるいは当館のお客様の中でも見受けられるのですが、展示室での会話ですね。海外などでは親子連れ、あるいは友達、カップルで作品について真剣にお話しされている様子を見てすてきなと思うのですが、日本ではどうしても周りへのご迷惑が先に立ってしまって、今はより感染防止の観点から、静かにするということがやや叫ばれがちなのですが、猪熊さん、今は感染防止が大事ですけど、その辺りのこともコロナ収束後についてお考えでしょうか。

I: まさに同感です。予約制については、私どもの人気の展覧会や人気の作品がある時は、とても暑い日、とても寒い日、雨の中、長蛇の列で並んでいただくことがあって、いつもその長蛇の列を見ると大変心苦しく思っておりました。しかし日時指定予約ということになって、そのようなことが随分と緩和されたということ。それから会場内も、ある程度、快適に見られるということですね。ただ、予約制を導入すると展覧会に入っただけの最大の人数が自然と出てきてしまうので、観覧可能な人数が限られてしまうというのは少し苦しいというか悩ましい点なのですけ

れども、そういうことを見極めながら快適な鑑賞空間と、より多くの人に見ていただくということを、何かこういう中から工夫を生み出したいと思っております。それから会場内での会話ですね。これは本当に悩ましいところです。先ほども少し申しましたけども、やはり私も、展覧会というのは作品と出会う場所だと思い込んでおりました。

多くのお客様も、作品を見に行くのだと、そういう考えがあったのではないのでしょうか。ところが実際には無意識の中で、同じ興味の人が集まる社交の場である。それは知り合いと行かないで1人で行ったとしても、その場にいるのは何らかの関心の似通った人たちの集まりである。だから他人の会話とか聞き耳立てるわけではないけど、何かこれを見てどうこうとか話をしていたり、「あれ、あんなふうに見えるね」というのを聞くと、あれ、ちょっと見落としたかな？ と思って、その会話をきっかけに、もう一回、見直しに行ったりすることもあります。東博にお越しの方々のそういう話の内容を聞かないまでも、話し込んでおられたりする姿を見るのは大変やりがいのある場面ですので私も好きですし、自分が企画したり関わった展覧会であると、少々、耳がダンボのようになってしまうこともあります。自分の関わった部分について、どのように評価されているのかなど、ちょっと気になってしまうという部分があります。だから今回、その辺りも社交の場でありながら、やはりあまり大声で騒がないという、そういう場面を考えるきっかけになったと思っております。

S: 考えてみれば、今日のテーマでもある日本美術って、もちろんパブリックで、大勢の方に一堂に見せるために作られたものもありますけども、お茶の美術が象徴的ですが、親密な空間で間近に見るといふ、そういう目的で生み出されたものたちもある。そういう辺りの、この捉え方。今日も他の3つの発表でも紹介がありました。デジタルツールなど使って、その近くて遠い、遠くて近い、バーチャルとリアルをうまく絡み合わせて見るということもできたらいいのかなというふうに思ったりもします。

I: 同じく思います。

S: 今日はいろいろな興味深い事例をお聞かせいただきまして、ありがとうございました。また今後、新たな活動を楽しみにというか、お互いに悩みながら、考えながら、進めていければと思います。どうもありがとうございました。

I: 本日はどうもありがとうございました。引き続き、どうぞよろしく願いたします。